

東北関東大震災被災地にボランティアお出かけ予定の理美容師さんへ

RIBI/LUBリビラブ

全国心的ストレス緩和・衛生ケア理美容師学会

日本理美容師会

はじめに

この度の大地震によって壊滅的な被害を受けた東北の太平洋沿岸、原発事故で避難を余儀なくされた多くの被災者の皆様に対して心よりお見舞い申し上げます。また今回の危機的状況を日本全体で乗り切るには、各方面の自主的な支援が必要です。

理美容師さんが災害時に被災地へ出向き、避難所の方々へカットボランティアに出かけることに対して、「一般者が出かけても邪魔になるだけでは?」「現地の同業者の反感をかう」等、様々な意見がありますが、私たちが今回実際に出かけてみてそんな危惧は一切無用でした。むしろそんな議論をしていられないほど現地の状況はひっ迫しています。

結論から申し上げます「行きたいのならどんどん行って被災者のお役に立つべき」です。

ただしそれにはいくつかの注意点や心構えが必要です。

被災者の皆様が一瞬でも受けた傷が癒えるよう、せっかくお出かけになられた尊い行動が報われるために、私たちが実際に体験してきたことを、お出かけの際の参考にして頂ければとこの資料をまとめました。



破壊しつくされた街



劣悪な環境の避難所

～現地の状況～

私たちが出かけた場所は宮城県石巻市内です。この市内だけでも50人程度の小規模から700人前後の大規模な避難所まで数十存在します。地震発生から1か月が経過した4月11日から12日にかけて実際に最前線に入ってみると、テレビでは知らされていない極限の人々の生活がありました。

比較的大規模の避難所には物資や各地からの炊き出し隊が頻繁に訪れていましたが、小規模の避難所にはそれらは皆無で食糧さえ不足している状態です。

電機や水道のインフラも整備されておらず、4月とはいえ東北の春はとにかく寒く体育館や教室に寝泊まりしている皆さんはさぞかし寒いと思います。荷物で仕切られた空間もプライベートなどあるはずもなく、着の身着のままこの場所に命からがら集まってきた人々が溢れていました。

思うに原発事故で避難された方々はまだこの人たちよりはマシだと思います。土地に戻れる日はわからないけれど家も家財も残っているわけで、東北太平洋沿岸の避難者は家も財産も先祖の位牌や家族までも失っ

ており何も無いのです。

政府は原発事故と関連の避難者の対応に追われて、全てを無くした沿岸部数万人の方々のサポートが皆無状態で一か月を迎えていることが現場を見てはつきりわかりました。

支えになってあげているのは自衛隊の皆さん。そしてボランティアで派遣された他の自治体からの応援職員や、巡回している医療関係、介護関係、はるばる炊き出しに来てくれている民間団体です。

ほとんどの避難所は地元の市町村職員が対応しているわけではなく、各地からの応援職員がなんとか本部を形成しており避難所の対応をしているため、即断即決ができない案件が多いことも避難所の生活環境を向上できない要因に見受けられました。



カットよりもまず先に「衛生」



準備中からテント前に長蛇の列

～理美容師さんにできること～

すでに地震発生から1か月が経過しており、避難所の衛生状態が劣悪になりつつあります。暖かくなるにつれてさらにその状況は悪化していきます。そして先の見えない状況がこれ以上続くと、「なんとか頑張ろう！」という気持ちも萎えてきます。

現実にテレビでは映らない場所で「もう死んだ方がまだ」「どうしていいのかわからない」わずかに残る希望の光さえ失いそうな人々を見かけました。

とにかくあの状況から多くの命を救い、もう一度立ち上がるには一日でも早く、数十兆円の資金を投入し瓦

礫の撤去、産業の再開、雇用の創出、そしてせめて人間として当たり前の生活権利を守ってあげることが必要です。政府が大胆な復興支援に踏み切る日を、一日延ばすごとに恐れていた2次災害が確実に急増します。

そこでもっともケアが必要な、東北沿岸部へこれからボランティアに出かける予定の理美容師さんには、次の点に注意して被災者の援助にあたって頂きたいのです。

(*ただし以下は原発事故被災の大型施設避難所ではなく、津波で破壊された東北太平洋沿岸部へお出かけの際の心構えと注意点です)

行列の裏では鍋とカマで大量のお湯を沸かしています



一刻も早く設営し皆さんのケアを

～心構えと注意点～

1、ボランティアではなく「救援」として出かけて下さい。

避難所の皆さんは精神的にも衛生的にも極限状態です。髪の毛を切ってあげることは当然ですが、それ以上に大切なのは「衛生管理」です。自衛隊のバスが各避難所を回って一週間に一回程度お風呂を提供したり、温泉へ連れて行ってくれるのですが、実は多くの方々はそこまでの気力がない方ばかりです。

髪の毛は不衛生極まりなく、シャンプーをしても一回だけではフケやホコリが落ちません。この先暖かくなるとダニやシラミが確実に湧いてきます。

髪の毛をカットすることよりもシャンプーが第一です。カットする際も使ったハサミや器具は煮沸消毒すること。

避難所にはお年寄りの数が多く、多くの方は寝たきりや体を動かせる方でも、自分の居場所を動こうとしません。保健婦さんや介護士さんが巡回して手肢の消毒を行いたいのですが、とても手が回らない状態です。理美容師は国家資格で国民の「衛生向上」を託された専門職です。避難所を巡回している医師や看

護師のアドバイスを聞きながら、これらの方々の衛生管理「消毒布で手や足を拭く」「襟足や脇周辺を拭いてあげる」などのケアを最優先で行ってください。

それができるのは理美容師だけしかいません。被害の規模があまりにも大きすぎて、とにかくできることを何でもするという意思と、専門職であるという使命を持ってボランティアではなく「救援活動」として出かけることが被災地の皆さんを救う行動になります。

2、マスクと白衣を必ず着用すること。

上記の通り衛生状態が極めて深刻で、かつ避難所内ではノロウイルスや風邪も流行っています。また津波が持ち込んだ大量の海砂が校舎の中まで入っており、ホコリがものすごい中での作業になりますから、いつものヘアデザイナーのような恰好では仕事になりません。

また現地の治安状況も決して良いわけではなく、現実に私たちが入っていた2日間も各県から派遣されたパトカーが不審者をチェックする目も厳しくなっています。「専門職で現地に来ている」と一目で判別がつくことが無用のトラブルを防止することにもなりますし、理美容師の存在価値を高めます。



3、職務の表示票を身に着けること

現地の状況で説明した通り、避難所の本部はほとんどが他県からの応援職員が1～3名程度いるだけです。また彼らに届け出ないと避難所でカットさえできません。彼らは2日程度で交代してしまいますから、現地に到着してスムーズに仕事ができるためには、「何のために来ているのか?」「どういうことで避難者のお役にたつのか?」一目で判る表示票を着用することが最善の準備です。

実際に施術を求められた避難所の方々も安心してくれました。

繰り返しますが施術を提供する方々はテレビの前では明るい表情ですが、実際は心も体も極限状態です。業界特有の「ラフコスチューム」「個性の私服」での活動は避けるべきです。

夜を徹しての作業が続きます



列が途切れやっとなメンバーの写真が取れました

4、聞き手に徹すること

施術中の会話は理美容師の得意とする部分であり、また癒しや明日の活力を相手に差し上げることで、理美容師は尊い能力を持っています。

しかし今回ばかりは「聞き役」に徹してあげてください。こちらからお聞きするより相手が語ったことを聞いてあげることで、少しの時間でも「よき理解者」として寄り添ってあげることが何よりのケアになります。

また場所が場所ですから、現地へ出かける理美容師は、明るく染めすぎた髪は暗めに戻し、あるいは長く伸びすぎた髪は衛生的に切ってから出かける、あるいは帽子を着用するなどの気配りが必要かと思われます。

5、責任者とチームを決めて団体行動をとること

現地は瓦礫の山や、余震も多く（実際に私たちが活動した2日間も震度5以上が2回ありました）危険な地域での作業になります。一個人が単独行動を起こすと、全員を危険に陥れることとなりますので、団体行動が全てです。場所を離れる際にはチームリーダーに必ず声掛けをすること。限られた時間で効率よく多くの皆さんをケアするために気づいたことはリーダーに報告し判断を仰ぐこと。

さらには隊の責任者を決めて、その人間は「作業服にネーム表示」で活動すると、避難所の本部職員も安心し積極的に協力してくれます。非常時、緊急時の活動には社会一般では当たり前のことですので頭に入れて下さい。

6、ボランティア保険に必ず加入すること

現場では何が起きるか予測できません。災害地に出かけるボランティア専用の保険がありますので事前に加入してからお出かけになるべきです。また避難所によってはボランティア保険に加入していない方は活動をさせてくれないケースもあります。

加入手続きは居住地地元の社会福祉協議会で行えます。

7、無理をしないこと

現地での作業は相当な激務です。自身が疲れ切つては被災者の方々を癒したり、満足なケアを提供できません。疲れを感じたら交替で休憩をとることが大切です。

8、地元の理美容師さんと協力し合うこと

大きな避難所の場合は被災された理美容師さんもいる場合があります。現場に着いたらまず「理美容師さんがその避難所にいないか？」聞き取りをして、いるようであればその方にカットをお任せすることが望ましいでしょう。地元の方はこれからも地元で生きていかねばなりません。

また皆さんが同じような境遇ならどうでしょうか？余所から来た同業者に今までカットしてきたお客様を、目の前で施術されるのは気持ちの良いものではありません。地元の同業者に花を持たせ、自分たちはシャンプーや衛生ケアに回る気遣いが、行動の成功を約束してくれます。

また、家も店も道具も津波に流された現地の理美容師さんがいます。そんな方々に使わなくなって眠っていたハサミや道具を差し上げるのも同業者として当然の支援です。

実際に私たちが用意しておいた道具類を贈呈させて頂いた被災地の理容店経営者さんは、「ハサミだけは残っていてほしかった」と、影も形も無くなっている店のあった場所へ毎日ハサミを探しに行っていたそうです。

「これでせめて避難所の人たちの髪の毛を切ってあげられる」と涙ながらに喜んでくださっていました。



道具を見て喜んでくださった地元の理容店経営者さん

以上私たちが現場で体験してきたことが参考になればとの思いから、まとめたレポートではありましたが、いずれにしても理美容師の専門職たる救援活動が今、多くの避難所で求められています。

新潟中越地震の際には、直接地震によって亡くなった方よりも、その後の避難所暮らしで亡くなった方の数が2倍でした。今回の被害は比較にならないほどの大災害です。

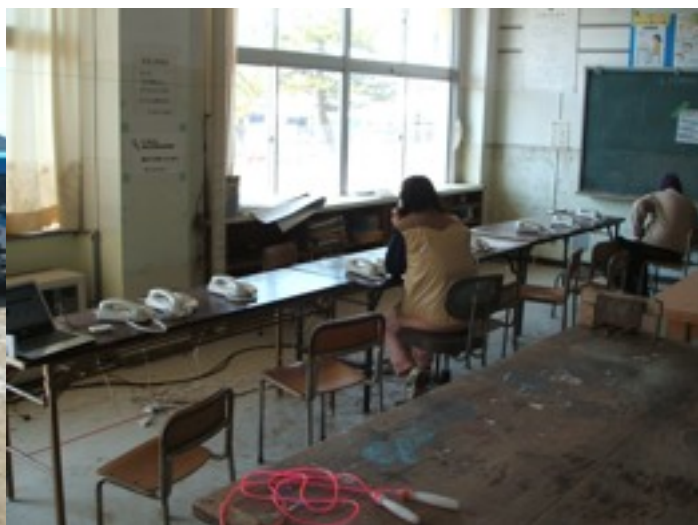
そして衛生ケア・心的ストレス緩和ケアは、この先何年にも及ぶ作業になります。私たちは覚悟を決めて悲惨者の皆様に寄り添い長期的な救援活動を行っていきます。

その趣旨に賛同してくれる方であれば理容師でも美容師でも構いません。

そんなことはどちらでもいいですから、「衛生管理」の専門家たる職分として一人でも多くの被災者をケアしてあげてほしいのです。



RIBI/LUB本部からのサポートメンバー



無料の電話室にはすすり泣く嗚咽がいつまでも残っていました

終わりに

被災地での救援活動は、各避難所の情報収集が第一です。現在のところ県や市町村の役場、社会福祉協議会に問い合わせても、正確な情報は得られないのが現実です。

とりあえず準備を整えたら出発し、実際に避難所を見て回り、どこにニーズがあるのか？人がいるのか？優先的にケアしなければいけない避難所はどこか？を判断することがベストです。

私たちも今回50名規模の小規模避難所と、650名の大規模避難所の二か所をケアしてきましたが、小規模の避難所の方が「よくこんなに小さなところを探してきてくれたね」と涙ながらに喜んでくださっていました。

ケアが行き届いている場所、全く行き届いていない場所の差が激しく、避難所の選定は難しい作業です。しかし、たった一人でもそこにケアしなければいけない、ケアを求めている被災者がどこかにいるはずで

す。その方を救えるのは皆さん理美容師しかいません。被災地の復興は人命捜索から人命救助に移ります。

皆さんが今度は被災地救援の主役なのです。

全国心的ストレス緩和・衛生ケア理美容師学会および、日本理美容師会の活動を支援しているRIBI/LUBでは、少人数あるいはお一人でチームを組んで被災地に行くことができない理美容師さんに、積極的に救援活動に参加して頂けるよう、定期的に救援隊を組織し被災地へ派遣いたします。

参加ご希望の方はお気軽に下記までお問い合わせください。

またチームを組んで行かれる場合の現地情報や注意点などお聞きになりたい場合もお気軽にご連絡ください。

RIBI/LUB救援隊係 TEL：03（5464）3841

{被災地の救援に行きたいのですが} {被災地の情報を聞きたいのですが} と一言おっしゃってください。